十数年来の咽喉頭異和感並びに不眠例の Neuzym による治療経験

—その鼻X線所見—

日 比 孝 也・福 田 精

“Pharyngo-Laryngeal Neurosis” and Insomnia Successfully Treated with Lisozym(Neuzym)

Takaya Hibi

(Meitetsu Hosp., Nagoya)

Tadashi Fukuda

(Gifu Univ.)

A 48 yr. old man complained of a stiff esophagus and lower airway, of a ten year duration. Nevertheless he could swallow food and had no difficulty breathing. He had consulted different ENT specialists and x-rays and examination of chest, nose, paranasal sinuses, esophagobronchoscopy were always negative. Various drugs were prescribed and all were without effect. The last three years he had had a continuous insomnia.

In radiograms of the paranasal sinuses, we noted a slight circumscribed clouding in the ‘regio olfactoria’ on the right side and we prescribed Lisozym (Neuzym) 270 mg day for 2 weeks. After these 2 weeks he no longer complained of abnormal sensations in the pharyngolaryngeal region or of insomnia and radiograms showed that the clouding of the ethmoid cells had completely disappeared.

緒 言

咽喉頭異常感、閉塞感は咽喉頭神経症と呼ばれるように愁訴のみ多く、他覚的所見がとらえ難い。患者のみならず我々医師も困却する疾患である。ここに報告する症例は市長が耳鼻科医である某市の市役所勤務の職員である。この10年の間に当該市民病院のみでなく、東海地方の医療機関の所々に紹介され精査を受け治療された。しかし一向良くなりず咽喉頭異和、異常感のみならず不眠症となり10年余り悩んできた症例である。当科で精査しても特に所見を得なかったが、唯、右篩骨に局限する慢性病変を見出し、これを非観血的に治療したところ短時日の間に、愁訴は雲散霧消した。且つ、他覚的にも病巣の治癒を鼻鏡所見並びに鼻X線所見により証明し得たのでここに報告する。

症例

48才，男子，公務員，現病歴：10年前某日かための米飯を食べた為か，のどと食道をあらした。医療を受けたがそれ以後のどに何かひっかかっている感じ，異和感，閉塞感が続き治らなかった。やがて御飯，麺類がのどにつまるような感じがし，食思なく，又，右胸が息を吸い込んだ時につまった感じが続いた。この為10年の間に東海各地の大学病院，諸病院等10カ所余り受診したが，何れも異常なしと診断された。この間，胸部X線検査10回，鼻X線検査6回，気管支鏡検査2回，食道鏡検査1回，食道・胃透視2回，又，心電図，血液諸検査を受けたが，その回数を記憶出来ぬ程幾度も受けている。その他に鼻中隔矯正術さうけた。（表1）しかし，症状の改善を認めず最近では愁訴増強し，殊に右側に症状強く訴え，又，夜寝ていると呼吸が出来なくなり恐ろしい夢を見てとび起きるのが一夜に2，3回あり，午前3時から4時頃まで不眠が続くようになった。

表1 10年間に受けた検査と回数並びに手術

胸部X線検査	10回
鼻X線検査	6回
気管支鏡検査	2回
食道鏡検査	1回
食道・胃透視	2回
心電図	} 頻繁数え切れず
血液諸検査	

鼻中隔矯正術（昭和52年秋）

当科所見

型の如く，種々の検査をしたが，異常所見は見当たらなかった。只，右嗅裂が閉じ中甲介に軽い腫脹があった。鼻X線をもう一度精査したところ右嗅裂部にび慢性陰影を認め，篩骨洞は軽度陰影増強認めた。（図1）

以上所見より右篩骨洞炎それに続く咽喉頭炎と診断し消炎酵素剤ノイチーム 270mg/日2週間投与，イソジンガーグル，局所処置として鼻

図1 右嗅裂部にび慢性陰影を認め，篩骨洞には軽度影増強を認めた。

洗浄，抗生剤並びにステロイドのネブライザー，吸入を施行した。3週後生き生きと明かるい顔で来院し10数年の症状の消失を述べた。かくして10数年悩まされた咽喉頭異和感，鼻閉，胸のつまった感じ不眠も消失し，顔色良好となり全快した。鼻鏡所見は右嗅裂よく通り中鼻道の閉塞もなくなった。鼻X線所見も前回認められた嗅裂部のび慢性陰影は消失しよく通っている。（図2）

図2 前回（図1）認められた嗅裂部のび慢性陰影は消失しよく通っている。

遠隔成績

その後，当科を訪れることなく3カ月を経た。経過を問い合わせたところ風邪を引き，又，再発した感があったが，あらかじめ与えたノイチーム 270mg/日一週間の服用により治癒したと手紙にて回答あり，次で本人来院受診した。右篩骨洞炎の所見は鼻鏡，X線にても見られず愁訴も消失，顔色が全く以前と異なり生き生き

としていた。唯、右胸部異和をなお訴えている。胸部X線を検討すると長年の経過により、

右気管、気管支に軽度の拡張が当初より認められなお存続するのが原因と考えられた。

考 按

咽喉頭異常感症例の数多くの局所要因の内、鼻疾患特に後鼻漏があげられている。(三宅他)¹⁾

副鼻腔炎又は鼻炎を有し、著明な後鼻漏が認められる場合は鼻治療により異常感の消失することは容易に考えられる。しかし本例にあっては著明な後鼻漏認め難く、従来6回鼻X線診断をうけているが、何れも異常なしといわれてい

る。このように一見正常と思われるX線でも篩骨洞付近の僅かな病変があり患者を10数年の長きにわたり苦しめた症例である。しかも薬剤の発達によりこれが簡単に非観血的に、すなわちノイチーム 270mg/日、2～3週間の服用により、又、感冒に基く再発も同じく薬剤により全快せしめ得ることが出来たので報告した。

結 び

本例にあってはかえりみると愁訴が右側に強かった点が注目される。訴えを考え右側に病変を求め篩骨洞病変を認め得て、これを非観血的に治癒し得た点、考えさせる症例である。

参 考 文 献

- 1) 三宅弘：咽喉頭異常感の診断と治療。耳鼻臨床 67：918～920, 1974.
- 2) 高橋良，他：慢性副鼻腔炎に対する塩化リゾチームの治療効果—二重盲検法による検討—。耳展 17：731～743, 1974.
- 3) 高山乙彦，他：咽喉頭部異常感とノイチーム 耳

鼻咽喉科領域におけるノイチーム療法シンポジウム講演集 62～64, 1968.

原稿到着：昭和54年1月13日

別刷請求先：日比孝也

〒451 愛知県名古屋市中区松前町3-45
名鉄病院耳鼻咽喉科